“ By Love Serve ”

名古屋柳城短期大学

ちゃぺるにゅーす

第 31 号　2018 年 12 月 19 日

2018 年度年間聖句

あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。
わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。
【ヨハネによる福音書 13:34】

目　次

巻頭言「オアシスの原点」チャプレン 主教　大西修・・・・・・・・・・・・・・・2

＜前期の礼拝から＞
同窓会企画「ゴスペルに親しむ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
「不思議に導かれて歩む～クリスチャンになる前となった後～」勝間田明子・3

＜後期の礼拝から＞
「魔女の宅急便のキキはよい保育者になれるか」司祭　市原信太郎・・・・・5
ＡＨＩ巡回報告会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
「生きがいを求めて～私の学生時代～」学長　長縄年延・・・・・・・・・・7
創立１２０周年記念礼拝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

巻頭言

「オアシスの原点」

チャプレン 主教 大西修

「オアシス」とは砂漠の中で水が湧き出で、樹木が生えている緑地のことです。転じて慰めと安らぎを与えるところという意味にもなります。創立者 M.ヤング先生は、柳城がオアシスとして名古屋の地でその役割を果たすことを、切望しておられたに違いありません。ここでいう柳城とは物理的な場所や建物を言うのではなく、柳城の働きに関わるすべての人々、幼子はもとより、教師、保育者、職員、学生とその親たち、教会の信徒たちなどを指します。詩編 23 編の中でダビデは「主は羊飼い、･･･主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる」と歌っています。

今年創立 120 周年を迎えた柳城学院は、現在オアシスとしての役割を果たしているでしょうか。羊飼いである神さまに導かれ、その呼びかけに答え、その愛に育まれた信仰を携えてカナダから来日されたヤング先生は、神さまが与えてくださる愛の水（命の水）が湧き、緑豊かな木々の息吹きが、人々に清らかな心を与えるような柳城の成長を目指して、30 余年間を名古屋の柳城で全身全霊を注いで働かれました。

昨年末亡くなられたノートルダム清心学院理事長渡辺和子シスターは、オアシスの頭文字をとってこのように言っています。「オ」は「おはようございます」の「オ」、「ア」は「ありがとうございます」の「ア」、「シ」は「失礼します」の「シ」、「ス」は「すみません」の「ス」です。「おはようございます」、「ありがとうございます」、「失礼します」、「すみません」は、この砂漠のような時代に、人が人として生きていく上で基本的な挨拶の言葉です。柳城がオアシスとしてその役割を担っていくために、「おはようございます」、「ありがとうございます」、「失礼します」、「すみません」が、誰の口からも自然に出てくるような心を備えていることは大切です。そのためには、まず皆さんが家庭の中でオアシスが日々交わされるように、率先して始めてみてください。それを何か照れくさいとか仰々しいとか思う人がいたら、多分その人は日ごろからオアシスを習慣にしていないのではないでしょうか。幼稚園、保育園、こども園、社会福祉施設の児童養護施設、養護老人ホーム、障害者支援施設などに実習に行った時も、率先してオアシスを使ってみてください。勿論、卒業し社会人として働くことになるどの職場にあっても同じです。オアシスは目上、目下の区別なく、誰に対しても大切なものだからです。慰め、安らぎ、憩いを与えるところとして、わたしたち（柳城）が存在する時、そこに一人一人を大切にし、生かし生かされるイエス・キリストの愛が、そこここに目に見える形で実現しているのです。

イエス・キリストがおられるところがオアシスです。社会の片隅で貧しく、卑しい人間として蔑まれていた羊飼いたち、そして異邦人でありながら、遠路はるばる救い主を訪ねてやって来た占星術の学者たち、かれらにとって辿り着いたイエスさまがお生まれになったベツレヘムの家畜小屋こそオアシスでした。

クリスマスの出来事は、わたしたちは勿論のこと、全世界中の人々にオアシスの素晴らしさを告げ知らせます。オアシスの原点こそ、主である神さまであり、神さまがわたしたちにお送りくださったイエスさまなのです。オアシスの原点、わたしたちに慰めと安らぎと憩いを与えてくださるイエスさまの誕生を共にお祝いいたしましょう。

前期の礼拝から　5月2日

同窓会企画
「ゴスペルに親しむ」

同窓会との共催企画として、ゴスペルシンガーの江崎理子さんをお招きし、ゴスペルコンサートが行われました。奴隷としてアメリカ大陸に連行されたアフリカ人らが、言語や宗教を一切はく奪されながら過酷な労働環境下に置かれていたことや、彼らとゴスペル（福音）との出会いなど歴史を教えていただいたのち、全員で行った発声練習もゴスペルそのもので、江崎さんのあとに続いて全身全霊で歌いました。読み書きができなかった黒人らは、実はたいへん頭が良く、教会で聴いたシンプルなメッセージを覚え、それに節を付け、仲間が覚えやすいよう工夫して伝えたそうです。

今回取り上げられた曲は

The little light of mine（私の中の小さな光）
Down by the riverside（川岸に重荷を下ろして）
Make us one（私たちを1つにしてください）
We shall overcome（我ら打ち勝たん）

のびやかな発声と江崎さんの自由自在なピアノの音色にゴスペルの原風景を感じ、エネルギーに満ちたひとときでした。

（文責：保育科教員　扶瀬絵梨奈）

前期の礼拝から　6月13日

「不思議に導かれて歩む
―クリスチャンに
なる前となった後―」

勝間田明子

わたしは 20 歳のクリスマスに「自分中心ではなく、神さまを中心にする生き方をしていきたい」と願い、洗礼を受けました。今日は洗礼に至る道のりと、その後に「変化した／しなかったこと」に焦点をあてます。その歩みを振り返ると一本の道にみえますが、実際にはたくさんの分岐点で立ち止まり、その都度「どちらの道を行くのか／行かないのか」を選んできました。わたしが道を選ぶときに働いた「不思議な力」は、そっと背中を押してくれるような、迷い悩むわたしを支え、励ます、ささやかで優しい力でした。

キリスト教に興味を持ったのは、クリスチャンであった伯母の葬儀。当時、わたしは 10 歳でした。快活で朗らかで、みんなに愛された伯母は43歳で亡くなります。この「伯母の死」が、自覚している「神さまとの出会い」です。伯母は美しい讃美歌と真っ白な花に送られて旅立ちました。そのとき、わたしの葬式はキリスト教式で、みんなに讃美歌を歌ってほしいと思いました。さあ、死んだ後のことが決まったので、次は「どうしたらキリスト教の葬式をあげてもらえるか」、つまり「どう生きるのか」が課題です。

洗礼に直接つながる出会いは、大学のときのこと。わたしは国際基督教大学（ICU）で森本あんり先生

（宗教学の先生で当時の大学教会・主任牧師）に出会います。洗礼準備会で「まだ聖書を全部読めていないし（読むと眠くなる）、仏教もいいなと思っている」と話し、キリスト教をもっと理解してからでないと洗礼を受けちゃいけないんじゃないかという悩みを伝えました。先生のお答えは、こんな感じだったかと思います。

1）「これまで」どう生きてきたかというより、「これから」どう生きていきたいかが大事
2）「全て理解してから洗礼を」と言っていたら、きっと、生きている間に洗礼は受けられない
3）理解してから信じるのではなく「信じてからわかることもある」
4）「祈り」は、自分の都合の良いお願いではない
5）「祈り」は集中であり、集中して祈ることは難しく、祈りに集中すれば自ずと道が見える
6）「祈ること」は「的を外さずに生きること」であり、「祈りはおこないである」
7）罪の本質は「自己中心」で、それは「自分を神さまのように扱うこと」

そして、先生は「あなたが神さまを選ぶのではない。神さまが既にあなたを選んだから、あなたは今ここにいるのではないか」と仰いました。あぁ、それならば、わたしなどには到底知る由もないご計画を信じ、いっさいを御手にゆだねようと思いました。こうして 10 歳で「死に方」が、20 歳で「生き方」が決まります。

では、「洗礼を受ける前と受けた後」で、わたしはどう変わったのでしょう。わたしの場合、受洗後は間違うことなく常に神さまを仰ぎながら生きてきた…はずもなく、相変わらず自分中心に物事を考え、何度も失敗し、何度も悲しみにくれています。鶏が鳴く前に、3回、イエスを知らないと言ったペテロは、まさにわたしでした。自分の無力を思い知ったとき、「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとへ来なさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ 11:28）という聖句がうかび、「まことにこの人は神の子であった」（マタイ 27:54）という言葉も響きます。

わたし「が」なんとかしよう、という「が」の強い自分を手放すのは難しく、「自分は欠けだらけの土の器だ、本当にそうだ」と今、ここで強く思っているのに、ふと気づくと、自分を中心に考え、例外をつくり、言い訳を繰り返しながら、自分の言動を正当化して振る舞う弱さを抱えています。わたしの弱さは、洗礼によってさっぱり洗い流されてしまうものではありませんが、クリスチャンとして生きることは、自分の力で自分を変えることすらできない自分に絶望することなく、その弱さに注がれる神さまの愛と、弱さも豊かに用いて下さる神さまの働きを喜ぶことなんだろうと思います。

「弱さこそが恵みであり、弱いからこそ、強い」。20 歳のクリスマスに、わたしは今日の讃美歌の一節「寒い冬の中　春は目覚める」にあるような「逆転の発想」を会得し、「信じる人」になりました。これまでの悲しいことや辛いこと、これから経験する苦しみや痛みも、わたしは恵みとして両手で丁寧に受け取り、祈りの中で喜びにかえることができます。…さあ、一緒に信じる人になりませんか？

本学中庭花壇

2018 年度信州リトリート（長野県小布施町、新生礼拝堂・新生病院、8 月 26～28 日

後期の礼拝から　9月12日

「魔女の宅急便のキキは よい保育者になれるか」

司祭 市原信太郎

9 月 12 日の礼拝は、以前本学で教鞭をとられていた市原信太郎元チャプレンのお話です。タイトルは「魔女の宅急便のキキはよい保育者になれるか」いうもので、お話の展開についてわからないまま始まりました。「こんにちは、市原です。2004 年から 2010 年までチャプレンをしていました。現在、菊地伸二先生がやっておられるキリスト教概論を担当していました。以前、ビデオを見て学習する授業を思い出して今日はやってみようと思います。

＜魔女の宅急便よりパイの配達のシーン＞

「主人公のキキは、上品な婦人より孫へのパイの配達を頼まれる。キキは婦人と苦労の末パイを焼き上げ、雨の中やっとの思いで配達をする。ところがパイを受け取った孫は、おばあちゃんのこのパイ嫌いなのよねと言った。」 今、皆さんは爽やかな気分ですか？おそらくモヤモヤしていると思います。一生懸命やったことが報われないシーンです。 ドラえもんというアニメがありますが、これは最後すっきりと終わります。なぜならば、いたずらをした子は怒られ、いい子にすると褒められる展開だからです。しかし、小学生に聞くと宅急便の方がリアルであり、自分に近いと言います。その後、キキはびしょびしょになって風邪を引き、寝込みます。寝込んでしまい、魔力を失います。

＜魔女の宅急便より、絵描きのお姉さんに出会うシーン＞

「キキが、魔力を失ってどうしたらいいかわからなくなる。そして絵描きのお姉さんと出会い、相談をしたら、やりたいことがわからないときはジタバタして、いったん止めて、そして気持ちが湧き出てきた時に元に戻ればいいということを聞く。キキはジタバタしていただけと気づく。」何にでも DNA があるように、魔女には魔女の絵描きには絵描きの、そして保育者には保育に携わる人というDNAを持った血があると思います。つまり髪型や日誌がなどということよりも、もがいているあなた自身は、保育者としての自分を育て、成長をしているそのものであるということです。

＜ある写真のスライドを見て＞

ここの教会の聖歌集のカバーは、フィリピンにおいて全部手織りで作ってもらったものです。7－8 年経っているけれど、まだ傷んでいません。私は、この作っている工場に柳城の学生を連れて行きました。柳城の学生は、とても人気者でした。言葉はあまり通じなかったけれど、保育者だということがにじみ出ていて現地の子どもたちにとても人気がありました。この中の一人は、卒業後 4 年制大学に進学し、その後海外青年協力隊で、保育者としてヨルダンで幼児教育に携わりました。 言葉が通じなくても、この人はいい人だということはぱっと通じます。つまりあなたからにじみ出てくる雰囲気を大事にすることは、とても重要なことなのです。

＜千と千尋の神隠しより、自分の名前を思い出すシーン＞

「千尋とハクが、元の世界に戻るために自分の名前を思い出す」 あなたはあなたであるという意味で、名前はとても大事です。先ほど話した柳城の先輩は、ホ

ームステイをしながら保育者としての力を花開かせました。つまり、私は私であるということがとても大事なことです。よい保育者とはいうことよりも、よい保育者になるにはどうしたらよいのでしょうか。キキが自分を取り戻していくように、保育者として花を咲かせるには、保育の勉強をして技術を身につけることだけではなく、保育者としての私に目覚めていくことだと思います。」

市原先生のお話のあと、私は魔女のキキが自分を取り戻して爽やかな風の中、ホウキに乗って飛び立つラストシーンを思い出しました。貴重なお話をありがとうございました。

（文責：保育科教員　菊池理恵）

後期の礼拝から　10月10日

「AHI巡回報告会」

アジア保健研修所（AHI）の巡回報告会の一環として、日本で2か月間の研修を行ってきたカミール・アンデロス・レイエス・ジュゴ（ミンミン）さんにお越しいただきお話を伺いました。ミンミンさんはフィリピンのカピス大司教区社会活動部というNGOに所属するカトリックのクリスチャンです。お話はAHIスタッフの中島隆宏さんに通訳をしていただきました。アジア保健研修所（AHI）は、愛知県日進市で、アジア各地の村々で人々の健康を守るために活動する現地の保健ワーカーを育成しているNGOです（アジア保健研修所のwebサイトより）。

AHIの研修生としては27歳という異例の若さのミンミンさんは、学校でいじめにあっていた過去やそのために自分の気持ちを表現できずにいたという経験を持ち、そうした辛い過去を払拭し、克服するためにも自ら行動を起こし、村や住民に関して多岐に渡る地域の課題を解決するために、若者に対して啓発するコミュニティー・オーガナイザーとして活動しています。種々の地域の課題を解決し、持続可能なコミュニティーを形成するためには、母国（フィリピン）の宝でもある若い人の力が必要となり、同時にそうした若者を地域を支えられるように育てていくことが必要となります。「世界はあなたたち一人ひとりを必要としている」との考えの下、ミンミンさんは地域の若者に対する教育やピア・コーチングなどの活動を行っています。

また、子どものための活動も行っており、特に昨年、フィリピンを大きな台風が襲い、大規模な水害による被害が生じたため、被害を受けた子どもたちに対して、さまざまな心理社会的支援を行っているとのことでした。コミュニティーの美化活動をはじめ、遊びやゲーム、ダンスを通じて人間関係を作ることで心のケアを行ったり、洪水で大事な家や家族が流されてしまった子どもたちのために文房具を寄付したりするなどの経済的な支援を行った経験をお話くださいました。

さらに、子どもへの取り組みのエピソードとして、貧しい家庭環境にあり、6人きょうだいの3人目である女の子、リリィについてのお話もしてくださいました。リリィは毎朝4時に起き、水撒きや他のきょうだいの世話、家庭菜園など家事を行い、昼間働きに出ている母親の代わりとなって働いているとのことでした。こうした環境にあるため学校に通うことが困難になっていましたが、ミンミンさんらの支援により現在では頑張って学校に通い卒業を目指しているとのことでした。

ミンミンさんは、自身が「世界のために何が提供できるか。世界のために何を犠牲に取り組めるか。」を考え活動を行っており、同時に「人に尽くすことが恵みでもある」と言い、さまざまな困難や問題に直面している人々とのかかわりを通して、イエスに会うことができる、イエスと語り合うことができると語ってくださいました。また、

AHI での経験を通して、人のために尽くすことの大切さを改めて学び、それを地域を含めた平和活動に繋げていきたいという希望についてもお話くださいました。

お話の最後では、「学んだことを社会に貢献し、生かすことが重要であること、そのために行動をしなければならない」というメッセージを学生、教職員に送っていただき、「行動のない信仰は死んだ信仰である」というミンミンさんのモットーが強く感じられたお話でした。

（文責：保育科教員　高瀬慎二）

後期の礼拝から　10月24日

「生きがいを求めて ～私の学生時代～」

学長 長縄年延

今日は私が皆さんと同じ18～21歳ごろ、私の学生時代の話をします。時代は違うのですが、青春時代にあって生きがい、職業や結婚についての夢などみなさんと同じようにいろいろ考えていたころです。

私が入学した1959年（昭和34年）は、4月に皇太子ご成婚式、9月に伊勢湾台風に襲われこの地域で5000人の多くの人々が亡くなった年です。大学の教養部は滝子にありましたが、クラブ活動は、演劇部かオーケストラか迷っていましたが高校の先輩に誘われて野球部に入りました。

何のために生きるのか、何を生きがいとして生きるのか、あれこれ思い悩んでいました。皆さん達のように「保育士になりたい」というはっきりしたものはまだなにもありませんでした。

野球部だけでは何か物足りず、自分自身の生きがいを求めて、木造の教室で机を囲んで行われていた「聖書研究会」に出席しました。先輩に誘われ20分ほど歩いて山脇町の名古屋学生センターへ行きました。日本聖公会の学生キリスト教運動（SCM）の活動拠点であり、聖書研究会　キリスト教研究会　社会問題研究会など先生を交えて真剣な議論がかわされていました。柳城の学生も参加しており、私がはじめて柳城生に出会った時でもありました。春休みと夏休みには3泊4日の特別研究会がびわ湖畔の北小松や恵那の雀のお宿で行われ、「学生と社会」「日本人とキリスト教」「現代社会に生きる」などテーマを決め講師を呼んでの研修会でした。

キリスト者の社会的責任は何か、今遣わされた場で我々のになうべき課題、十字架は何か？　キリスト教の愛についての考え方、フィリア（友愛）エロス（男女の愛）ストルゲー（家族愛）アガペー（神の愛）、四つの愛のなかで特にアガペー＝神の無限の愛について学びました。私たちがいまこうして生きて存在しているのは自分ひとりの力ではなく神様の愛によってである。一つの民族のためではなくすべての人々のために十字架につけられ死んだイエスキリスト。それを見ならって生きた初代教会のひとたち。

問題から逃げないで課題と正面から取り組むというクリスチャンの生き方に私はひかれました。1960年12月25日　大学2年の時、ここ名古屋聖マタイ教会で洗礼を受けました。そして教会につながり永遠の命を与えられ、多くの素晴らしい人たちに出会いました。

「愛によって仕えよ」を建学の精神とし純粋に保育に生きようとしていた柳城の学生たち。いまは高齢になられましたが素晴らしい生き方をされている方が多くおられます。私の妻も学生キリスト教運動の中で出会った一人です。結婚して50年今年金婚式をむかえましたが今も教えられることの多い毎日です。

今皆さんは若さあふれ、最も美しく輝いている時です。心も美しい人になり人々を愛し人々から愛される素晴らしい人になってください。聖書に学び、イエス・キリストに学

び、何物にもかえがたい自分自身の生き方を追い求めつかんでください。

求めなさい。そうすれば、与えられる。

探しなさい。そうすれば、見つかる。

門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。

誰でも、求めるものは受け、探すものは見つけ、門をたたく者には開かれる。

＜マタイによる福音書　7章7～8節＞

創立 120 周年を迎えました

カナダ聖公会宣教師のマーガレット･ヤングによって開設された柳城保姆養成所から時を重ね、柳城学院は創立 120 周年を迎えました。

晴天の恵みのもと、2018 年 11 月 1 日（木）に行われた創立記念礼拝では、創立者ヤング先生の意思を今日までわたしたちに持続させてくださった神様に感謝するとともに、日本聖公会ナタナエル植松誠首座主教（北海道教区主教）をお迎えし、「人生の海に錨をおろして――神の呼びかけが聴こえますか――」というテーマで記念講演をいただきました。

また同日午後には理事･教職員と学生宗教委員、サーバー学生が日本聖公会中部教区の共同墓地（八事霊園：名古屋市）に向かい、ヤング先生をはじめとする柳城学院関係者の前でお祈りを捧げ、献花を行いました。

「愛をもって仕えよ」という建学の精神のもと、私たちは豊かで温かな人間性をもった保育者の育成に努め、新しい時代を歩み続けてまいります。

（文責：保育科教員　扶瀬絵梨奈）

司式団入場

記念講演：植松誠首座主教

墓地礼拝

2018 年 12 月 19 日発行

ちゃぺるにゅーす　第 31 号

発行所：名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町 2-54
発行者：キリスト教センター
編集担当：扶瀬絵梨奈